
機械人形とぼっち人間

白餅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械人形とぼっち人間

【Nコード】

N7608Y

【作者名】

白餅

【あらすじ】

上司に酷く叱責され、周りの同僚からは蔑まれている主人公、豊とよ頃ころ誠人は廃棄処分なりかけで、セールに出されていた家事機械人形を偶然見つける。埃を被る姿に自分と重ね、誠人は衝動的に買ってしまう。そして始まったのは、ぎこちない、けれど、不思議と悪くない、ロボットと底辺主人公の同居生活だった。

00 - 喪いたくなかった気持ち

音が、聞こえる。

歓喜に満ちた、心地よい旋律。

同時に薄れていく何か。無くしてはいけない。喪失してはいけない。そのはずだった。いや、もうとつくのとうに喪っていたのだな、唐突に蘇ってきたのだ。一回は手放した。しかし、醜く私は、それを逃がさないとする。

あまりにも過去にとらわれ続けていた自分がいて情け過ぎて、涙が出てくる。

思い出だけで生きていてるほど、私は、単純ではない。だけど、喪つては生きていけなかった。忘却も喪失も望んでいなかったはずなのに。なんでこんなことになってしまったのだろう。

世界を覆う、重たい雲と淀んだ空気。荒廃した世界に、人間は私しかないかった。

ざあざあと、雨が降っている。

壊れかけの少女^{わたし}は、最後の記憶を必死に繋ぎ止め、目をつむった。その方が、まだ繋ぎ止めた気がしたから。

やがて、目をゆっくり開くと空を見上げ、最後の言の葉を紡ぐ。ずっと、言えなかった。けれど、ずっと、言いたかった。

もう、最後で。

届くかはわからないけれど。

『私も、

したいです――、マスター』

01 - 機械人形

二週間前に壊れた電子レンジ。

壊れてからどうにか直そうと尽くしたが、型が古かったために直すことは出来なかった。長年使っていた機械には、愛着が沸いてしまふ。棄てる日、どうしようもなく悲しく感じたのは不思議な話だった。

今日、二代目となる電子レンジを買いに来た。新しいのは何かと面倒くさそうだったが、折角なので最先端の電子レンジを買うことにした。

「59568円になります」

高い、と心底思いながらキャッシュカードで支払いを済ませることにする。レジは、とてつもなく美人の顔をした女性だった。年は二十代後半といったところだろう。人間離れた妖艶さと美人さ違和感を覚えた。普通に、電気家電メーカーの服とはつぴをきているが、どうも不釣り合いだ。しかも、髪は金色で、腰まである。どこからどう見てもアメリカ人だとかの異国人に見えるのに、本能的に違うと思う。

自然と、目が、名札にいく。

——試用運転中 お仕事代理機械人形“杏寿”

途端に、彼は納得した。機械人形なら当たり前の容姿だ。

機械人形は半世紀前から売り出されている、プログラミング式のロボットである。限りなく人間に近い行動、言葉、そして人間以上の仕事の早さ、運動能力、容姿。この辺りは、さすがロボットというところか。

もちろん、普通に対話もできるし、ニュースなどで情報収集をし、言語を増やすこともできる。まるで赤ん坊のように、見たこと聞い

たこと全て記憶してしまうのだ。

よっぽど人間よりも高性能で、いつしか全て機械人形のものになってしまいうるぞうで恐ろしい。

機械人形所有者は金持ちから始まったが、今は、もう一般者にも届く安さになっている。老若男女、すべて揃っていて、体格体型は機械人形に言えば、自由に変わるらしい。

近頃は一層よく見るようになったが、一般者が買える金額のものは、基本的に喋り相手くらいで、知識を増やせない、幼い男女をモチーフにしものだ。機械人形の種類は、仕事、警備、各稽古、家事、愛玩と様々で同じ種の型でも、人間同様に同じ顔はない。

こんな立派な機械人形も、今まで五万と見てきた。人形ならば当たり前前の容姿だし、今さら驚くこともない。

レジで会計を済まし、帰路につく。

しかし、やはり羨ましかった。あんなに容姿端麗な人形ならば一人や二人欲しくなる。機械人形を盗む人々の気持ちも分からないでもないかった。

盗むとは言え、機械人形を犯罪に使用したりする馬鹿なものが出たので、買う際には身分証明書やらを必要とする。

前に欲しいと思い、店頭に並んでいたのを見たことがあるが、どれも二十万とかで、高いのだと、二百万はゆうに超えていた。

ネットだと、オークションで安く売っているが、どれも金だけ取って配送はしないものばかりだ。誰か良くて容姿端麗な機械人形を売るか。機械人形は主人に従順であるために、売ろうと思う人はいなかったのだ。

電気家電メーカーの店から離れ、雑踏を抜け、やがて人通りの少ない、親しんだ道になった。仕事帰りはいつも通る道だったから、何となく足早だったのが、緩くなる。もう、日がくれていた。時刻は20時くらいだろうか。

「——ん？」

気付くと、道路を挟んだ道端に小さな電気家電のお店があった。いつも不定期で開いてるから、開いてるとは思ってもみなかった。どうせなら、地域貢献でこっちで買えばよかったと思いつつ、電気のためが切れていたことを思い出す。

車が来ないことを確認し、道路を渡ると、電気家電の店に入った。店に主人の気配はなかったが、奥からTVの音が聞こえるから奥に下がっているのだろう。

彼は、家の蛍光灯と同じ型を探していると、此処でも機械人形を売っていることに気がついた。しがない店だと思っていたから、機械人形を置いてるとは意外だ。収益はしっかり出てるのか、他人事ながらに不安である。

機械人形は、1mの高さの箱に入っていて、初回はねじまきをしないと動かない。ねじまきをする、次回からは自分でするらしい。一般に出回る安めの、会話しかできない機械人形は、主人がまわさないといけないとか。

ふと、ひとつの機械人形の箱に目がいく。いかにも開けましたというような、後が残っている。しかも、箱には「売れ残り」という紙が張られていて、驚くことに値段が4万円と格安だった。

思わず座り込んで見る。箱には、機械人形をつくったエレニフ社のポップがデザインされており、注意事項が書かれていた。だが、機種名は書いていない。

「どうだい。買ってみるかい？」

「——っ！」

突然声を掛けられ、体を震わす。

横には、いつの間にか主人が立っていた。背が曲がっていて、随分な歳のようなが、優しそうな、柔和な笑みを浮かべている。

「い、いえっ！ 安いなあ！ って思っつて！ まあ、僕買う金ないんですけどねっ！」

慌てた様子で立ち上がると、蛍光灯の方に行き、家の型のものを一瞬で判別して、手に取った。そして、主人に差し出し、受け取ってもらうと同時に財布を取り出す。

「ふむ。——お兄さん、人見知りかい？」

「え？ あ、はあ、まあ、恥ずかしいことに」

自分の短所を指摘され、顔が熱くなるのを感じた。彼の顔がみるみるうちに赤くなっていく。

「そうかいそうかい。なあに、悪いことじゃないさ。——千円ね」

主人は、人懐こい笑顔を彼に向けると、レジに向い、蛍光灯のバーコードを読み込む。

彼は、黙って千円を渡し、蛍光灯を手にとると、出口に向かった。
「……お兄さん、さっきの機械人形、一週間サービスっていうもんがあるんだが——、してみないかい？」

彼の背を見ながら、思案顔になった主人が投げ掛ける。

「え、」

「別に買わんでもいいよ。その機械人形は、二、三回、サービスをしたんだが、買ってはくれなかったものだから」

「い、いいんですか？」

彼が、歓喜の色をたたえ、振り返る。願ってもなかった事だった。一回は機械人形を手にしてみたかったのだ。機械人形がどういうものか知らなかったし、お試しがあれば、どういうものか分かる。即決だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7608y/>

機械人形とぼっち人間

2011年11月23日00時45分発行